

Title	現代チリにおける「邪視」習俗:トライゲン区(1): エレナ・ピントさんの事例
Author(s)	千葉, 泉
Citation	大阪外国語大学論集. 27 p.35-p.58
Issue Date	2002-09-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79889
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現代チリにおける「邪視」習俗：トライゲン区(1) －エレーナ・ピントさんの事例－

千 葉 泉

Testimonio sobre “el mal de ojo” en Chile contemporáneo: Comuna de Traiguén (1) － Caso de doña Elena Pinto －

CHIBA Izumi

1. 序

本稿は、現代のチリに存在する「邪視 mal de ojo」の習俗に関し、ある女性の「邪視祓い師 *santiguadora*」が語った証言の記録である。

チリはヨーロッパ系住民の占める割合が相対的に高く⁽¹⁾、また近年比較的順調に経済成長を続けたこともあって、人種の複雑な混交や低開発を特徴とするラテンアメリカの中では、近代化が進んだ国の一つと見なされている。

だがその現代のチリでも、ひとたび人々の日常心理の深層に目を向けると、「邪視」や「邪術」など、合理的思考では割り切れない習俗が、地域、社会層、民族を問わず、広く根付いていることに気が付く。

「邪視」とは、ある人物が視線を通じて他者（人、動物、事物など）に邪悪な作用（病氣、死など）を及ぼすという原理である。⁽²⁾ 邪視にまつわる習俗は、すでにエジプト、ギリシャ、ローマといった旧大陸各地の古代文明の時代から記録され、中世のキリスト教世界にも継承されたのち、一見衰退しつつも今日まで世界の各地に伝わっている。⁽³⁾

現代のチリにおける邪視の習俗⁽⁴⁾に限っても、地域等によってその実態は多様だが、ほぼ共通するのは次のような認識である。すなわち、「重い血 *sangre pesada*」を持った人物が、抵抗力の弱い赤ん坊や幼い子供などを凝視したりこれを褒めちぎったりすると、頭痛、高熱、吐き気などを催し、ひどい場合には死に至る。邪視にかかった子供は、病院に行っても原因が特定できず、近代的な化学薬品を投与しても治らない。そこで「サンティグアドーラ *santiguadora*」⁽⁵⁾と呼ばれる治療師が、十字を切ったり、キリスト教系の祈祷を唱えることにより、邪視にかかった赤ん坊や子供を治す、というものである。

このように、現代のチリにおいて広く普及している「邪視」とは、合理的な説明のつかない原因に起因し、「信仰」というやはり合理性を超えた力によって解消される、つまり、合理性の枠外で生成する習俗であるといえる。

2. エレーナ・ピントさんの証言の意義

エレーナ・ピントさんは、証言当時年齢 62 歳の女性で、チリ中南部第 9 地域トライゲン区の市街部の周縁地区に位置する一軒家に居住していた。

ピントさんは、少なくとも曾々祖母の代から続く邪視祓い師の家系に属し、彼女で五代目、そして六代目にあたる彼女の娘の一人も現在邪視祓いを行っている。ピントさんは邪視祓い以外にも、エンパチョという胃腸系の疾患⁽⁶⁾や脱臼の治療、胎児位置の矯正など多様な代替医療行為を実践するほか、臨終時の幼児に聖水を施す役割も果たしている。

トライゲンは、第 9 地域の他の大半の地区と同様、前世紀の中葉まで先住民族マプーチェが制圧してきた地域である。その後、チリ政府が実行した「平定」(1862～83 年)とよばれる作戦により軍事的敗北を被ると、それ以降マプーチェたちは狭い共同体に集住することを余儀なくされた。⁽⁷⁾ こうして「解放」された広大な「国有地」は、チリ人やヨーロッパ系の移民者によって殖民が行われる。トライゲン区に西接するルマコ区には、1904～5 年に入植したイタリア人によって建設されたカピタン・パステーネ集落もある。⁽⁸⁾

つまり、ピントさんが居住するトライゲン区は、先住民、伝統的なスペイン系住民、19 世紀に入植したイタリア系やドイツ系の住民など、多様な民族の文化伝統の交錯に特徴付けられた地域であるといえる。

このように歴史的、あるいは民族構成的な意味で複雑な背景を有する地域に住み、家族の間で数世代にわたって継承されて来た「邪視祓い」の技能を操るピントさんの語りには、興味深い指摘が多く含まれている。

第一に、邪視の生成原理、治療者としての心構え、治療法、治療に関係する曜日や数などの象徴的重要性、邪視祓い等の民間医療知識の伝承の問題に関する具体性の高い情報は、少なくとも純民俗学的な価値を有するであろう。

第二に、近代的な医療を実践する近隣の病院との協力関係に関する情報は示唆に富む。

トライゲンの市街部には、外科、内科、小児科、歯科など、充実した体制と近代的な設備を誇るトライゲン区立病院がある。ピントさんは、この病院に勤める医師や看護師から回された、邪視、エンパチョ（胃腸器系の疾患）、脱臼などの疑いのある患者の治療に当たっていること、また、こうした協力関係がすでに彼女の母親の代には始まっていたことなどに言及している。

ここから、多様な価値観が交錯する地にふさわしく、「代替医療」を積極的に評価し、これを活用しようとする（少なくとも一部の）病院関係者の態度がうかがえる。

第三に、キリスト教会と邪視習俗との関係に関するピントさんの証言も興味深い。

すなわち、一般住民の方は子供の邪視を祓ってもらう目的で神父のもとを訪れるという。一方、神父の方は彼らの訪問を拒否することはないが、邪視習俗は共有せず、気休めのために「祝福」を与えるに過ぎない。ここには、神父の典礼行為に関する、住民と神父との間の認識上のズレがうかがえる。

それに対し、一昔前の神父は邪視習俗を共有していた旨ピントさんは指摘している。

また、ピントさんが説明する具体的な邪視治療法の中にも、様々な形でカトリック教会の典礼の影響が感じられる。十字を切る、聖像を使う、「神と子と聖霊の名」において行われる祈祷、ノベナリオ（九日間の祈祷）等々がそれである。

そうしてみると、今日カトリック教会が邪視習俗を迷信として否定していても、ある過去の時期においては、教会関係者が邪視という現象を明確に認識し、むしろ積極的にその治療や予防などの方策を実践、流布していたという可能性が考えられる。⁽⁹⁾

この点は、支配的な制度と民俗の習俗との関係における、ダイナミックな変遷の過程を物語るという意味で示唆深いといえよう。

第四に、邪視治療に起因する複数の民族の交流があげられる。

ピントさんのもとを訪れるのは、彼女と同じような伝統的なスペイン系白人住民だけではない。先住民族であるマプーチェ、19世紀の後半から今世紀の初頭にかけてチリ南部に入植したドイツ系やイタリア系移民の子孫など、さまざまなルーツを持つ人々が、ピントさんが操る多様な代替医療行為を求めて日常的に来訪するという。

これは一方で、近代医療体系が、彼らの身体や精神に関わる不幸を完全に解消できていないという事実を物語る。

だがそれと同時に、疾患という具体性の高い、切迫した不幸を前に、民族や社会層といったイデオロギー上の相違の壁を越え、事実上の民族交流が力強く生成している実態を示唆している。

また、逆方向での民族交流の事例として、ピントさんの担当分野ではないものの、「邪術」の被害に会った白人系患者が、先住民のシャーマン「マチ」の治療を受けているという指摘も示唆深い。⁽¹⁰⁾

本稿は、以上見たように、さまざまな意味で現代のチリ人の意識の深層に生成するある習俗を熟知する、一人の「邪視祓い師」の語りを記録することを目的とする。

以下、筆者とピントさんの間でスペイン語で行われた対話の一部を、邦語訳、原スペイン語版の順に掲載する。「千」および（C）は筆者、「ピ」および（P）はピントさんの発言であることを示す。

なお、読者の理解を容易にするために、一部内容の省略、記述順序の変更等を行ったが、話し手の言葉使いそのものについては、単なる言い間違い等の部分を削除した以外、一切手を加えていない。

3. 謝意（Agradecimiento）

「邪視」に関するこの貴重な証言を与えてくれたトライゲン区在住のエレーナ・ピントさんに、深く感謝いたします。

Le agradezco profundamente a la Sra. Elena Pinto, residente en la Comuna de Traiguén, por haber compartido conmigo este valioso testimonio sobre “el mal de ojo”.

4. エレーナ・ピントさんの証言

〈邦語訳 (Traducción en japonés)〉

〈1〉信心こそ第一

「千」はい、では、あなたが病院で治療することが難しい病気を治療するとお聞きしたのですが。そのことについて少し話していただけますか。

「ピ」 ええとそうね、まず、これは世代を越えて受け継がれて来るものっていうことね。私の祖先たちがやっていて、それで母が私に遺産として残し、私が実践し続けている、そういうことを本当に必要とする人たちの安寧のためにね。

というのは、知っておいて欲しいんだけど、これをやるためには強い信心を持たなきゃならないっていうことよ。もし信じる心を持たないのなら、あなたに何の効果もありはしない。だって、医師の、医者のところへ行って、とても高価な薬を与えられたとしてもね、もし信じる心がなければ何も効果はありはしないでしょ。というわけで、だから私の治療を求めてここに来る人たちに条件としてただ一つお願いするのは、信じる心を持って下さいということなの。

だって、何をおいても神様が始めにおられるのよ。そう思いませんか。

〈2〉利害勘定抜きに、善意で人を助けること

でも、いつも、決して利益を求めることなく人助けをしてきたわ。そのことを教えてくれたのはお母さん。「ねえ、お前」って言ってね、「これをあんたに教えた時」、そう言ってね、「もしいつか誰かがやって来たら、実際にやって来るはずだけど、決してあんたの方からいくらって決めてはだめ。絶対にね。相手が『いくらですか。』って聞いてくるのが普通だけど、そうしたらあんたは、『あなたが払えるだけでいいです。』って答えなさい。『もし払えるのならそうしてもらいますけど、もし払えないとしても、私はやっぱり報われます。でも、私には人助けをしたっていう満足感が残りますから。』、ってね。」そういうこと。そうお母さんは私に教えてくれた。で私はこのことを、生涯にわたって実践してきたわ。私はもう 62 歳なのよ。で、神様が私に言うまで、「ここまででもういいよ。ここまでで終わりだよ。」ってね。それが私流のあり方なのよ。

「千」つまり、ある人が自分の意思で払いたいのなら払う、ってことですね、いわば。

「ピ」 その通り。もし彼らが望むのならもらうけど、そうでないのならね。でも、「いくらいくらです。これだけ払ってもらいます。」って言って、私の方で決めて払ってもらうのではないの。(中略)

「ピ」 あのね、私のところに夜中の二時とか三時に人が来ることもある。その時間には私はもちろん寝てるはずよね。でも私は決して赤ん坊を診ることを拒んだことはないわ。決してね。また、金儲けのためってことも決してない。私は起きてその赤ん坊を診てあげ

る。だって、私はそのご両親の心中を察するに、どんなに絶望しているだろうって。わざわざ私のところにやって来るのだからってね。それでとても大きな善良な信心を込めてね、我が神様のお陰で赤ん坊は治る。元気になるの。

〈3〉邪視の原因

「千」それから、説明してもらえますか、では、「邪視」ですけど、その病気はどのような原因によるものなのかを。

「ピ」邪視の信仰は次のようなものなの。赤ん坊ってとてもかわいいもの、そうでしょ。それで、だからね。赤ん坊の血は弱い。赤ん坊なのだからね。で、（大人である）私の血は強い。それで、その子の方を見つめて、「ああ、何てかわいい赤ん坊なの！」って。それだけのこと。でも、心の中で、あるいは赤ん坊に向かって「神のご加護がありますように。」ってすら言わなかった。何もね。

すると、その後間もなく赤ん坊は、あなたがいわゆる（強い）血の持ち主だとすると、赤ん坊はむずがり始め、神経が高ぶり始める。それで、私が（治療のために）赴いたり、あるいは私のところに（赤ん坊を）連れて来て、私が邪視祓いをするわけ。というのは、その症状は赤ん坊の脳を冒す。頭が痛くなるの。頭が、脳が痛くなる。それで、私が出かけて行って邪視祓いをする。それで赤ん坊は治ってしまうってわけ。

「千」で、もしそのままにしておいたら、もっと悪くなるんですか。

「ピ」危険なことになる。とても危険なことね。言っておくけど、赤ん坊が死んでしまうことさえあるのよ。

というのは、私にも経験があってね、エスターニョ先生がまだ生きておられた時のこと、あの、病院に入院していたある赤ん坊を診に行ったことがあるの。お母さんはビクトリアの人でね。彼女は「邪視」を信じてはおらず、「エンパチョ」も信じず、何も信じていなかった。信心の無い人だったのよ。

それで、彼女（看護婦）たちがお母さんに言ったの。「あのですね、あれこれの治療を施したんですけど、赤ちゃんは全く回復していません。あちらの方に、いつも子供の邪視祓いに来てもらってる婦人がいましてね、エスターニョ先生公認の人なんです。行ってみませんか。」って。

「いやよ！」ってね。頑として首を縦に振らなかったの。それでね。この婦人が薬を処方してもらいに出た時、彼女（看護婦）たちが私を迎えに来てね。私は出かけたわ。でも不幸なことに、あのね、邪視祓いが丁度終わるっていう時に、赤ん坊は亡くなったの。赤ちゃんに何が起こったかわかる。目が体内に陥没したのよ。それでお母さんが戻ったとき、「奥さん」って言ったものの、赤ちゃんを探すあの人にこう言ったの。一体どうやって亡くなったなんて伝えたらいいのかわからない有様だったんだけどね。「亡くなりました。」って言ってね。やっぱり「邪視」だったのよ。あのね、でもそのお母さんっていったら、それはもう泣き叫んでね、お許し下さいって神様に嘆願していたわ。なぜって、「息子が死んだのは私のせいです。何故なら私は決して信じようとはしなかったのですか

ら。], って言ってね。

だから、私がここにやって来る人にただ一つお願いするのは、「お願いですから、信じる心を持って下さい。」ってこと。もし信じる心がないのなら、来てもらわない方がいいのよ。だって、ご存知の通り、信心は山をも動かすものでしょ。でも、もしあなたが信じる心を持っていないのなら、どこかへ行っても何にもならないわ。それは、私があなたに「とっても有名な先生がいるから、診てもらいにお行きなさい。」っていうのと同じこと。でも、もし私がその先生を信用していなけりゃ、何も効果が無いことはわかってる。そうは思いませんか。

〈4〉家族の間で代々伝承される治療知識

「千」でも、そうした知識の全て、いわばとても広い知識をお持ちですが、あなたはそうした全てのことを、ただお母さんから学んだんですか、それとも……。

「ビ」母からよ。

「千」で、あなたのお祖母さんは、つまり同じ職能を持つてはいなかったんですか。

「ビ」とんでもないわ。つまり、母の曾祖母、母の祖母、母と伝えられて来て、母が私に伝えたのよ。で、もしかしたら私の代で途絶えてしまうかもね。何故って誰も習おうとはしなかったもの。

わたしの娘、戸を開けたあの子だけど、彼女は邪視祓いができるわ。それに娘婿、その写真に写ってる人だけど、あの人は脱臼を治せる、私が教えたのでね。私が彼に教えたの。あの人は術を知ってる。あのね、もうかなり知識があるのよ。(中略)

「ビ」というわけで、それらの知識は、全部母が教えてくれたものなの。で私は、誰か他の人にこれを覚えて欲しいんだけどね。だって、何も残すことなくこの世から逝ってしまいたくはないもの。だってお母さんはいつも私にこう言っていたわ。「ねえ、お前、こうした事を覚えなさいな。とても役に立つから。苦痛を治す、軽くする術を他に持たない人がたくさんいるんだから。」ってね。それで、もし自分の手中にある事なら、やってあげることができる。そう思いません。人助けってことね。(中略)

「ビ」(なぜ邪視治療等の知識を習得したかという)私が興味を持ったからよ。というのは、私の他の兄弟はみんなもう結婚していて、家から離れたところに住んでるの。私たちは24人兄弟だったのよ。それで私が末っ子だったわけ。

私はいつも母が赤ん坊に対してしていることに興味を持っていた。でも私はお母さんがその辺に薬草か何かを持っているかどうか見ていたんだけれどね。そうではなかった。決してね。お母さんは赤ん坊を手にとって、で深い信心、深い信仰を込めて祈っていたの。で、彼女がしていたのはただそれだけだったわ。

で、ある日その事をお母さんに言ってみたの。すると私に言った、「お前、私があなたに教えてあげるからね。」と言ってね。「私はお前にこういう事を覚えて欲しいの。」ってね、

「だって、あんたは本当に興味を持っているもの。これはあんたの役に立つだろうよ。あんただけじゃなくって、ね、他の全ての人たちの役に立つことになる。母さんはいつ死んでしまうかも知れない。」と言ってね、「だから、私はあんたに覚えて欲しいんだよ。」ってね。それで私はそうした。習い始めたの。

「千」それは大体何歳のことですか。

「ピ」私は、ええと、今 62 歳。お母さんが亡くなったのは今から 22 年前の事だった。で、私に教えてくれて 8 ヶ月たった時、母は亡くなったのよ。それで、全ての知識は私が受け継いだってわけ。それで、この土地の人はみんな私にこう言うのよ、「エレニータさん、私たちは、あなたの身にどんな悪いことも起こりませんようにって神様、聖母様をお願いするんですよ。だって、一体誰が私たちの子供を治してくれるんですか。娘さんにお教えなさいな。」って、そう言われるのよ。

娘はもう修得したわ。「エンパチョ」を砕く術を知ってるし、邪視祓いの術を心得ている。でも、整骨には手を出そうとしないのよ。ええ。人が痛がるのを見るのがいやだから、やりたくないっていうんだけどね。私に言わせれば、骨が脱臼している方がもっとつらいんだけどね。そんな具合なのよ。

「千」でも、少なくとも、それでは、あなたが知っていることのいくつかは修得したって言いますか。

「ピ」ええ。確かにいくつかのことは覚えたわ、そう。

「千」それでは、その事もあなたは神の与える才覚だと思いますか。

「ピ」それは天賦の才ね。もっと言えばね。何と言えればいいかしらね。それは神様が何人かの人に……。ええ。各自はこの世でそれぞれ何かをすることをあらかじめ定められているの。あなたはいまやっているこの事をするためにいる。私は自分が隣人にやっていることをやるためにいるのよ。.

〈5〉邪視祓い法（1）：十字を切る

私は「邪視祓い」もやるわ。「邪視を祓う santiguar」っていうのは、子供がひどく泣いて、頭が痛い時のことよ。でもそれは、「父と子と聖霊の名において汝に邪視祓いを施す」という風に言うの。それは十字架の記し、つまり十字を切るわけよ。カトリックらしくね。ええ。

というわけで、そのようにして、十字も切るの。

それ以外に、聖水をふりかけることもするわ。赤ん坊がこんな風に病気になって、何て言ったらいいかしらね、こんな風に突然、急にそんな風になってしまった時にね。で、神父は近くにいないと。それで、そうした事が必要になるのよ。

「千」赤ん坊が臨終の時っていうことですか、つまり。

「ピ」その通り。ええ。その場合、赤ん坊のために十字の記しを切ってあげる、ただそれだけよ。深い信心を込めてね。

〈6〉邪視祓い法(2)：電話での邪視祓い

「ピ」あるいは、電話をかけてきてね、お祈りで赤ん坊のために邪視祓いをしてくれっていうこともあるわ。というのは、お祈りでもできる、邪視祓いすることはね。赤ん坊の名前を教えてもらって、それで私が祈祷で邪視祓いをする。電話でよ。聖像を前にしてね。

子供の、赤ん坊の名を言い、言うべき言葉を発するの。それは簡単なお祈りでね、「私は父と子と聖霊の名において汝に邪視祓いを施す」っていう意味なの。たったそれだけ。言うことはそれで全部。

「千」それは聖人の像の前でということですが、それとも……。

「ピ」ええ、聖母様のね。ええ、それに、神様のでも、何でもいいのよ。あるいは何も聖像がないときには、ただ神様の名においてやるだけ。

そうした諸々の事を私はやるのよ。

〈7〉邪視治療するのに適しているのは火曜日と金曜日

「千」忘れていた質問が一つあります。もし間違いでなければ、邪視を治療するためだったと思いますが、何人かの人たち、邪視治療師ではなくて、邪視治療師に治療してもらった経験がある人たちなんですが、その人たちによると、治療するべき日とかそんな感じで、あるいは避けるべき日でしたか、知りませんが、月曜日に、あるいは他の日に……。

「ピ」火曜日と金曜日⁽¹¹⁾に治療するのよ。今日(金曜日)は邪視祓いするのにおあつらえ向きの日和ってわけ。火曜日と金曜日よ。

「千」ああ、邪視祓いをするのにね。

「ピ」邪視を抜き去るためにね。

「千」それで、治療するのは一日だけですか、それとも何日かやるんですか。

「ピ」9日よ。いつも奇数でなければだめなの。ええ。火曜日と金曜日にね。9回に達するまで火曜日と金曜日にね。9日間が終わるまでやってね。で事は解決ってわけ。

〈8〉邪視治療にまつわる数は奇数

「千」ええ、それでは、邪視についてですが、それを治療するには、金曜日に初めてもいいし、あるいは火曜日に初めてもいいと。ああ、でも9度ですね、つまり。

「ピ」ちょうどね、例えばだけど、私がもう邪視祓いを始めたとするでしょ。ちょうどこの前の火曜日だったとするわね。すると、今日(金曜日)がまたその日というわけよ。また今度の火曜日、また今度の金曜日、また今度の火曜日、また今度の金曜日と、そんな要領で終わるまで続けるの。

でも、やるときには必ず、紙にその人の名前を書いて聖像の淵のところに置いておくの。で、そうしておいて邪視祓いをするってわけ。「マキ」⁽¹²⁾っていう名の枝を持って邪視祓いをする。5本の枝を持ってね。絶対に偶数ではだめ。いつも奇数なのよ。⁽¹³⁾それで、赤ん坊を抱いてね、で枝を持って、最初は2本の枝で始めて、次に3本の枝を持って終える。で、それから5本全部を一緒にしてと。それで5本の枝を持って赤ん坊にこう言うの。

「私は汝に邪視祓いを施す」って、ずっと十字を切りながらね。「私は父と子と聖霊の御名において汝に邪視祓いを施す」とね。5度そうするの。で、それが邪視祓いよ。そんな風にして邪視祓いをやるの。

「千」つまり、常に奇数だと。

「ピ」いつも奇数よ、絶対に偶数はだめ。いつも奇数なの。

「千」というのは、偶数は悪い……。

「ピ」だめ、だめ、だめ。効かないもの。ええ。必ず（偶数の）反対でなければだめ。

〈9〉「邪視除け」としての「ノベナリオ（9日間の祈り）」

「千」それでは、邪視に関してだけは、特定の曜日でないといけないと。

「ピ」火曜日と金曜日よ。

「千」たとえある婦人が、例えば水曜日に来たとしても、治療はできないと。

「ピ」構わないわ。構わずに邪視祓いをする。ええ、やっぱり邪視祓いをしてあげるわ。

でも、ただし子供が再び邪視にかからないようにするためにしなければならないのは、それを9度やらなければならない。その9度は、火曜日と金曜日にやらなければならないのよ。

もちろん、この瞬間に赤ん坊が連れて来られたら、あるいは明日であろうと、あさってであろうと、日曜日でも木曜日でも、私は同じように邪視治療をしてあげる。それは構わないのよ。

それでその人が望んで、こう言うの、「エレナさん」って、いつもそう言うんだけど、「ノベナリオ（9日間のお祈り）」⁽¹⁴⁾をやって欲しいんですけど、「ノベナリオ」って言うんだけど、「この赤ん坊のために」ってね。「ええ喜んで」って私はいうの。

で、最後に赤ん坊のためにスカプラリオを作ってあげるの。スカプラリオって何か知ってる。それは赤いリボンでね、中に犬の毛が入っているの。というのは、赤ちゃんが女の子の時は、雄犬の毛を入れてやらないといけない。それで、もし男の子なら雌犬の毛を入れてやらないといけないの。全て逆なのよ。それで、それをナイロンの袋に入れて作る。それで、赤ん坊の体の左側に吊るしてやるの。そう。それがスカプラリオよ。いつもそこにそれを付けさせて、風呂に入れるときとか、例えばね、服を着替えたとき、スカプラリオも付け直してやるの。そうすれば、決して邪視にかかることはないわ。

「千」ああ、それは「邪視除け」なんですか。

「ピ」それは「邪視除け」なのよ。それが有名な「魔除け」っていうやつ。そういうこと。

〈10〉病院との関係

「千」例えば、邪視のケースでも、つまり病院の方からあなたのところへ依頼が来ることはあるんですか。

「ピ」ええ、やっぱりね。私が病院に子供を診に行くのよ。

「千」病院の人たちに呼ばれてですか。

「ピ」 ええ。いつも私を呼びによこすの。看護婦長さんはいつも私を呼びによこすのよ。ここにはマリ・ポブレテさんっていう婦長がいてね、小児科の人なんだけど。彼女は、子供たちが病院に入院している時、いつも私が診に行くの。私の子たちを治すのよ。いつもね。

「千」 ほう、でも彼女は原因が邪視だっていうことを知っているんですか。

「ピ」 ええ。あるいは、エンパチョの時とかね。ええ。そうすると、それで彼女は私を呼びによこすってわけ。私は彼女の（患者である）子供たちを診に行って、それで治してあげるのよ。（中略）

それから、ここ（トライゲン区立病院）の運動療法師ラリートさんも同じ。誰か患者さんがやって来て、自分が診てみて、骨折でもなければ、……。すると「エレナさんのところにお行きなさい。彼女なら何かしてくれますからね。」って言うの。それで私が診るってわけよ。

「千」ということは、言ってみれば、いい分業関係があるってことですね。

「ピ」 ええ、とてもいい、とてもいい関係がね。

「千」 それぞれが……。

「ピ」 自分の役割を果たす。そう。その通り。（中略）

「千」 一つ質問なんですが。あなたのお母さんの、あるいはお祖母さんの時代にも、医者たちが患者を回すってことはありましたか、どうにもできないことがあった……。

「ピ」 ええ、もちろん。あのね。エスターニョ先生、もうお亡くなりだけれど、その人はこの病院の長でね、ディーノ・エスターニョ・ナシオーニ先生、この病院の長でね、何年前に亡くなったのかしら、それからテラーサ先生、もう一人のドクターだった方もね、彼らは自分で治療することが出来ないと見ると、「この人には邪術の事を熟知した人の治療が必要です。ですから、連れて行くように、この人を治療できる人物をお探しなさい。というのは、もう私の手には負えませんでしたから。これは何か超自然的なものです。」、そう彼らは言っていたわ。「我々の手の及ぶ範囲にはありません。」ってね。

「千」 でも、つまり、別の領域が存在すると信じていたと。

「ピ」 ええ。ずっと、生涯を通じてそうだったわ。その二人のドクターはずっと信じていたわ。

「千」 それは、彼らが、つまり、生きていたのは何年前のことですが、

「ピ」 エスターニョ先生は、何年前のことかしら、大体7年前に亡くなったのよね。ええ。それで、病院の入り口のところにあの人の写真があるわ。「ディーノ・エスターニョ・ナシオーニ」って書いてある。息子さんが一人いてね、米国にいてやっぱりドクターをしてるんだけどね。ええ。

「千」 それで、邪視の場合もそうでしたか。

「ピ」 その場合もそうだったわ。

「千」エンパーチョとか全てその類のものは。

「ピ」全部、全てね。

「千」ということは、かなり前から、何と言いますか、良好な双方向的関係が存在するとも言いましょうか。

「ピ」何年も前からよ。ええ。何年も前からね。

「千」あなたのお母さんの時からすでに存在したと。

「ピ」ええ、そうよ。私の母の時に事が始まったってわけ。で、後に母が亡くなり、それで私が後を継いだってわけ。

「千」ええ、ええ、ええ。ということは、既にあなたのお母さんが何人かのドクターに協力していたと、つまり。

「ピ」ずっとそうだったわ。それで私が後を継いだ。今の今までね。（中略）

〈11〉邪視習俗に関する現代のカトリック教会の態度

「千」例えばカトリック教会は、というのは、「邪視」は信仰の力で治る、でしょ。例えば「邪視祓い」について、カトリック教会はどのような立場を取っているんですか。もともと教会が教えたものなんですか、それともただ関係なく、独立して……。

「ピ」いいえ。教会からは独立したものよ。というのは、神父は一般にこうした事を信じていないの。人々は「この子を（子供を教会に）連れて行こう」って言って、ただ神父に祝福してもらうため、祝福を与えてもらうためにね。神父は子供を祝福する。でもおそらく「邪視」を信じてはいないでしょうね。彼らにとって「邪視」は存在しないのよ。

「千」ああ、たとえ人々が神父のもとを訪れたとしても……。

「ピ」赤ん坊に祝福を与えてもらうためにね。

「千」つまり、邪視を取り去るためにですね。

「ピ」その通り、とても絶望的な状況の時にね。神父は赤ん坊を祝福する、けど、邪視祓いのことは知らないのよ。彼らはこうした事は知らない。彼らにとっては存在しないの。

「千」それでは、神父は邪視を治療することは出来ないんですか。

「ピ」ええ。祝福を与えるだけ。

「千」ああ、言ってみれば気休めのためですね。

「ピ」気休めのためにだけ。でもそれだけよ。

「千」つまり、邪視を取り去ることができるのはあなたのような人だと、要するに。

「ピ」そう。私にはできる。何人か出来る人がいるけどね。でも私もいる、私は生涯にわたってそれを実践してきた。私の母がやっていて、私もこうしてやっているわ。

教会ではそんな風にするってわけよ。

「千」つまり、神父は信じていない……。

「ピ」というのは、何て言ったらいいかしら、ひどくモダンになってしまっているからね。今ではもう……。昔の神父はそうした事を信じていた。年輩の神父はね。あなたがおじいちゃんの神父さんと話せば、確かにそうだと答えるでしょう。邪視は存在するとね。え

え。

〈12〉全国から患者がやって来る

「ピ」で、そんな訳で話すことは山ほどあるわ。というのは、とても多くの人がここにはやって来るから。あちらこちらの人たちが私のことを知っていてね。私が宣伝しているわけではないんだけど。ビクトリアから来たり、テムコから来たり、アングルから、あっちの、プエルト・バラスから、オソルノから来たりとね。そんなあらゆるところから患者がやって来るの。

〈13〉マプーチェもグリングもイタリア人も患者としてやって来る

「千」ああ、最後の質問なのですが。ここには、例えば、あなたのところにマプーチェの患者さんもやって来るんですか、つまり、「チリ人」⁽¹⁵⁾の患者だけではなく。

「ピ」ええ、ええ。あらゆる人たち。あらゆる人たちがね。で実はね、私には数え切れないくらいマプーチェのコンパドレ⁽¹⁶⁾がいるのよ。で、彼らは敬意深くって優しく、もう極端なほどにね。それにきれい好きでね。この私よりもきれい好きなくらいよ。

私にはソイラ・パイジャオ・デ・チェウケラオっていう名のコマドレ⁽¹⁶⁾がいてね。ちょうど今日ここに來たわ。病気の娘さんを連れてた。胆嚢が悪くてね。彼らはコントレーラスっていう共同体の人たち。その共同体はこの、トライゲンの近くにあるの。

あのね、私にはたくさんのコンパドレがいるのよ。だって、142人もの名付け子がいるんだもの。チリ人もマプーチェもいろいろ含めてね。ええ。神様のお陰でね。

「千」つまり、マプーチェたちも、つまり、邪視の病人を、例えば連れて来ることはあるんですか。

「ピ」ええ。しょっちゅう。エンパチョとか、邪視とか、骨折とか、脱臼とか、あらゆる症状の人がね。あるいは、出産間近の人とか……もね。ええ。

「千」何て素晴らしいんでしょう。では、あなたは太いに人のために役立っているってことですな、つまり。

「ピ」ええ。私はこの土地のとても多くの人たちに知られてるわ。特に、ここトライゲンのグリング⁽¹⁷⁾みんなにね、アリベロス一族にもエスタブーン一族にも、これはトライゲンではとても名の通った人たちなんだけど、そんな風に、ウィッドメル一族にもね。

「千」つまり、もっと、言わば、経済的に裕福な人たちも来るわけですね、つまり。

「ピ」ええ、ええ。生涯ね。生まれてこのかたずっとお金持ちっていう人たちよ。(中略)

「千」でも、イタリア人たち、例えばカピタン・パステネ集落の人たちも患者としてですか。

「ピ」もちろんよ。言われるまでもないわ。いつだってその人たちは私のとこに来る。コルテス一族やジュビーニー一族、それにフレンチキニー一族の人たちとかね。その人たちはみんなここにやって来るの。その、何て言ったっけ、リオネッリ一族もね。パステネ

集落のその人たちがみんなね。パステーネ集落でね、もしいつか行く機会があったら、聞いてごらん下さい。「エレナさんをご存知ですか。」ってね。「もちろんだよ、あの人のことを私らが知らないはずはないだろ。あの人のところへ行って、あれやこれやを治してもらったことがあるんだから。」って言うでしょうよ。

〈14〉 邪術治療だけは扱わない

「千」別の事についてなんです。何人かの人たちから、例えば「邪術をかける」という事についても聞いたことがあるんですけど。そういうことは本当に存在するんですか、存在しないんですか。

「ピ」存在するに違いないわ。ただその事について、私は知らないけどね。いえ、その事は知りません。

「千」専門外だと、つまり。

「ピ」ええ、それは別もののなのよ。それはもう邪悪な事柄になるわね。そうしたことは私は手を染めません。善が存在するのなら、悪が存在しないって法はないって言うから。存在するはず、でしょ。でもそれについては、二つの異なる事なの。でも違う、そうしたことには、私はそうした事については知らないわ。そういうことは決して……。いいえいいえ。その分野だけは知りません。それ以外のことなら何でもだけれど、その事だけは違うわ。

〈15〉 邪術を取り去れるのはマチ（先住民シャーマン）だけ

「千」でも、あなたは、いわば、そういう意味で邪術を取り去ることができる人を誰かご存知ですか。

「ピ」ええ、普通農村に住んでる人たち、彼女たちは、何て言うのかしら、インディオ種族の「マチ」たちよ。彼女たちにはそれが出来るわ。

でも、「マチトゥケ」というやつ、それをやる時には、ほんとにもう、こんなにも高い額を取るのよ。というのはたくさんの人を連れて行かなきゃならないし、ワインもたくさん持って行かなきゃならないし、食べ物もたくさん持って行かなきゃならないし、病人を連れて行って、でそれで大騒ぎするってわけよ。

「千」でも彼女たちは実際に（邪術を）取り去るんですか、つまり。

「ピ」彼女たちにはできるわ。彼らはそうした事をやる術を心得ている。というのは、そういう知識も、やっぱり彼女たちとともに代々受け継がれてきたものだから。そう。彼女たちにはそれができるわ。

「千」でも、言ってみればチリ人、つまりマプーチェではない人たちですが、彼らの中には（邪術を治療する人）いないんですか……。

「ピ」それがいないのよね。いないの。ええ。いないのよ。私は誰かそれをやるってという人の事を聞いたことはないわ。いない。少なくともこの土地にはいないわ。

「千」でも、「邪術をかける」人は確かに、つまり「チリ人」の中にいるんですか。

「ピ」間違いないわ。絶対にね。自分ではやらなくて、自分でそうする術は知らないかもしれないけど、でも（彼女たちは）お金を払ってやってもらうのよ。お金を払ってね。絶対に、術を知っている人のところへ言ってお金を払うってわけ。そういう（女の）人は存在するわ。

「千」チリ人の中にですか。

「ピ」もちろん。もうほんとにねえ、そういう連中だらけなのよ。

「千」あなたは彼らがどうやってやるのか知っていますか。

「ピ」そういう方面のことは知らないのよ、ね。一体どうやってするんだか、全く知らないわ。ええ。

「千」でもそういう人たちが存在することは確かだと、つまり。

「ピ」ええ、ええ、存在するわ。

「千」でも、その病気を治すことが出来る人たちは、ただマチでなければならぬと。

「ピ」マチだけよ。それ以外の人たちは無理、出来やしないわ。

〈Versió original en español （原スペイン語版証言）〉

〈1〉 En todo Dios está primero

(C) Bueno, entonces, me informaron que usted trataba algunas enfermedades que eran difíciles de tratarse en el hospital. ¿Podría contarme un poco de eso?

(P) A ver, bueno, pa' empezar esto viene de generación en generación. Mis antepasados lo hacían, mi madre me dejó como herencia, yo lo seguí practicando para el bienestar de ciertas personas que realmente lo requieren.

Porque usted ha de saber que para esto hay que tener mucha fe. Si no hay fe, no hay nada. Porque usted podría ir a un facultativo, un doctor, y se le da un remedio carísimo, y si usted no tiene fe, no le va a hacer nada. Entonces por eso yo lo único le pido como requisito a la gente que venga aquí a veces a solicitar mi servicio, que tengan fe.

Porque en primer lugar Dios está primero. ¿No le parece?

〈2〉 Ayudar sin ningún interés y con buena voluntad

Pero siempre ayudando sin ningún interés. Eso me enseñó mi madre. “Mira, hija,” me dijo, “cuando yo te enseñé esto”, me dijo, “si alguna vez viene alguien, como va a venir, nunca tenga usted una tarifa. Nunca. Si la persona naturalmente que le va a preguntarle ‘cuánto le debemos’, usted le va a contestar, ‘Lo que usted pueda. Si usted puede me da, y si no, yo quedo pagada igual. Pero quedo con la satisfacción de haber ayudado.’” Eso. Eso me lo enseñó mi madre a mí. Y yo lo he puesto en práctica toda mi vida. Yo ya tengo sesenta y dos años. Bueno, hasta que Dios me diga, “Hasta aquí llegamos. Hasta ahí estamos.” Ésa es mi manera de ser.

(C) O sea, si alguna persona voluntariamente quieren pagarle, pagan, digamos.

(P) Claro, si ellos quieren me dan, y si no. Pero no porque yo le esté imponiendo diciéndole, “Me deben esto. Me deben lo otro. Esto tienen que pagarme.” (...)

(P) Fijese que a mí a veces llegan a dos, tres de la mañana con guaguas aquí Yo estoy acostada se supone a esa hora. Pero yo jamás me he negado a ver a una criatura. Nunca. Ningnos fines de lucro tampoco. Me levanto y veo a esa criatura. Porque yo no estoy en el corazón de esos padres, cómo andan de desesperados. Que acuden a uno. Y con tan buena fe, gracias a mi Dios que la criatura se mejora. Se sienten bien.

〈 3 〉 **Cómo se produce el “mal de ojo”**

(C) Y me podría explicar entonces, ¿“el mal de ojo”, a qué causa se debería la enfermedad?

(P) La creencia es la siguiente. La guagüita es muy bonita, no es cierto? Ya, ahí. Se supone que su sangre es débil, pu. Que es guagüita. Y mi sangre mía es fuerte, pu. Ah, entonces, yo la quedo mirando y, “¡Oh, la guagüita bonita!” Y nada más. Pero ni siquiera para mi interior dije, ni le dije a la guagüa, “Dios la bendiga”. Nada.

Ya ligerito después ya la guagua si usted tiene la sangre como se dice, la guagua se empieza a inquietar, a llorar, y a ponerse nervioso. Entonces yo llego, o si me la traen, yo la santiguo. Porque eso le ataca el cerebro. Le duele la cabecita. Le duele la cabeza y el cerebro. Entonces uno llega, santigua, y la guagua se le pasó.

(C) Y si se deja, se va a empeorar?

(P) Es peligroso. Muy peligroso. Se puede incluso, yo le voy a decir, morirse la criatura.

Porque a mí me tocó, cuando el doctor Estagno vivo, ir a ver un bebé que estaba en el hospital, ahí que la mamá era de Victoria. La señora no creía en “ojo”, no creía en “empacho”, no creía en ninguna cosa. Era una persona no creyente.

Entonces las chiquillas le dijeron, “Mire, le han hecho esto, lo otro, y lo otro, y la mejoría del bebé no es nada. Allí nosotros tenemos una señora que siempre viene a santiguar a los niños aquí. El doctor Estagno la tiene autorizada. ¿Por qué no vamos?”

“¡No!” No y no. Bueno. Fue a despachar una receta esta señora, y las chiquillas me vinieron a buscar. Yo fui. Pero desgraciadamente, fijese, que la estaba terminando de santiguar, cuando el bebé falleció, ¿Sabe lo que le pasó? Se le fue el ojito para adentro. Y cuando ella llegó le dijeron, “Señora”, ella buscaba a su guagua, dijeron, no hallaban cómo decirle que haya muerto. “Falleció.”, le dijeron. Y era “ojo”. Oiga, pero esa señora lloraba, gritaba, y pedía a Dios que la perdonara, porque “Es mi culpa que mi hijo se murió. Porque nunca creí”.

Bueno, yo lo único le pido cuando viene aquí, “Por favor, tenga fe.” Si no tiene fe, mejor no vengan. Porque usted sabe que la fe mueve montaña. Y si usted no tiene fe, a qué va a ir a una parte. Es lo mismo que yo le diga, “Hay un doctor muy famoso, vaya a verlo.” Y si yo no le tengo fe en ese doctor, yo sé que no me va a hacer nada. ¿No le parece?

〈4〉 **Estos conocimientos se heredan por generaciones**

(C) Pero todo ese conocimiento usted tiene muy amplio, digamos, ¿todo eso usted aprendió solamente de la mamá, o ...?

(P) De mi mamá.

(C) ¿Y su abuela no era del mismo oficio, digamos?

(P) Si pues. O sea que la visabuela de mi madre, la abuela de mi madre, mi madre, ella me lo dejó a mí. Y quizá conmigo va a morir. Porque nadie más aprendió.

 Mi hija, ella la que abrió la puerta, ella santigua. Y mi yerno, el que está ahí en la foto, él arregla zafadura, que yo le enseñé. Yo le enseñé. Él sabe. Sabe bastante ya, fijese. (...)

(P) Así que todos esos conocimientos se los debo a ella. Y me gustaría que alguien más lo aprendiera. Porque no me gustaría irme de este mundo sin dejar. Porque mi madre siempre me decía, “Mira, hija, aprende estas cosas que son muy útiles. Porque hay mucha gente que no encuentra en otra parte donde poder subsanar, aliviar sus dolores.” Entonces si uno está en alcance, uno lo puede hacer. ¿No le parece? De ayudar. (...)

(P) A mí me interesó. Es que todos mis demás hermanos ya están casados, están lejos de la casa. Nosotros fuimos veinticuatro hermanos. Entonces yo la menor.

 A mí siempre me interesaba lo que mi mamá hacía con la criatura. Pero yo miraba si mi mamá tenía alguna yerba por ahí, alguna cosa. No. Nunca. Ella tomaba a la guagua, a la criatura en sus manos, y le rezaba con mucha fe, con mucha devoción. Y eso era todo lo que hacía.

 Y un día que lo dije a mi mamá. Y ella me dijo, “Hija, yo te voy a enseñar.” me dijo. “Quiero que tú aprendas estas cosas”, me dijo, “porque te veo que tú estás interesada. Porque esto te va a servir. No solamente a ti, mi hija, sino que va a servir a todo el resto de la gente. Tu madre se puede morir cualquier día,” me dijo, “y yo quiero que tú aprendas.” Y lo hice. Empecé a aprender.

(C) ¿A qué edad más o menos?

(P) Yo, a ver, yo tengo sesenta y dos años. Mi madre hace veintidós años que murió. Y a los ocho meses que mi mamá me enseñó, falleció, pu. Así que conmigo quedó todo. Y toda la gente aquí me dicen, “Señora Elenita, pedimos a Dios, a Virgen que nunca le pase nada. Porque ¿quién nos va a mejorar a nuestros hijos? Enseñe a su hija,” me dicen.

 Mi hija sabe. Sabe quebrar “empacho”, sabe santiguar. Pero no se atreve a hacer quebradura de huesos. No. Dice que no le gusta a ella porque no le gusta ver sufrir a la persona. Yo digo, pero más sufren estar con hueso dislocado. Así pue.

(C) Pero por lo menos, entonces, aprendió algunas cosas de lo que Ud. sabe, digamos.

(P) Sí, sí sabe algunas cosas, sí.

(C) Entonces, eso es también usted cree que como don de Dios?

(P) Ése es un don de Dios. Sabe qué más? Cómo dijera yo? Eso son virtudes que el Dios a unos

... Sí. Cada uno está predestinado en este mundo para hacer algo. Usted está en esto que está haciendo. Yo estoy en lo que yo hago a mis semejantes.

〈 5 〉 **Modo de santiguar(1) : persignarse**

También santiguar. Santiguar significa cuando el niño llora mucho, le duele su cabecita. Pero eso se dice “Yo te santiguo en el nombre del Padre, Hijo y el Espíritu Santo.” Ésa es la señal la cruz, persignarse. Como católicos, sí.

Entonces, eso se hace y también se santigua.

Otra cosa que es poner el agüita también. Cuando la guagüita está enfermita así, como le dijera yo, como algo que fuera así de repente, de improviso. Que no hay un sacerdote cerca. Entonces requieren esas cosas.

(C) ¿Si está moribunda la guagua, digamos?

(P) Exacto. Ya. Entonces se le hace una señal de la cruz, nada más. Con harta fe.

〈 6 〉 **Modo de santiguar(2) : santiguar por teléfono**

(P) O me hablan por teléfono, que le santigüe una guagüita en oración. Porque también en oración se puede hacer, santiguarla. Me dan el nombre de la creatura, y yo la santiguo en la oración. Por teléfono. Delante de una imagen.

Se dice el nombre del niño, el bebé, quien sea, y se dicen las palabras que hay que decirse que es una oración tan simple, que significa, “yo te santiguo en el nombre del Padre, el Hijo y del Espíritu Santo.” Y nada más. Eso es todo lo que se dice.

(C) ¿Eso es delante de una imagen de un santo, o ... ?

(P) Sí, de una virgensita. Sí, también, de Dios, de donde sea. O si no tiene ninguna, lo hace en nombre de Dios no más, pu.

Todas esas cosas hago yo.

〈 7 〉 **Los martes y los viernes son los días especiales para tratar “el mal de ojo”**

(C) Una consulta que se me había olvidado. Parece que si no me equivoco era para tratar el mal de ojo, algunas personas me han dicho, que no son santiguadoras sino que tuvieron experiencia con alguna santiguadora, que se tiene que tratar algo así o evitar, no sé, los lunes, o los días ...

(P) Se tratan los martes y los viernes. Hoy día es un día especial para santiguar. Martes y viernes.

(C) Ah, para santiguar.

(P) Para sacar el mal de ojo.

(C) Y se trata solamente un día o varios días?

(P) Son nueve. Siempre tiene que ser nones. Sí, Martes y viernes. Hasta alcanzar nueve veces, entre martes y viernes. Hasta que terminan los nueve días. Y se terminó el asunto.

〈 8 〉 **Siempre tienen que ser nones los números**

(C) Ya, entonces, en cuanto al mal de ojo, para tratar eso, puede empezar el viernes, o puede empezar el martes. Ah, pero nueve veces, ¿digamos?

(P) Tal como, por decirle, yo ya empecé a santiguar, digo yo. Podría ser el martes que recién pasó. Hoy día me tocaría. Este otro martes, este otro viernes, este otro martes, este otro viernes, y así, hasta que termino.

Pero siempre que usted lo haga tiene que tener el nombre de la persona en un papelito puesto al orillito de una imagen. Y de ahí santiguar. Se santigua con una ramita que se llama “maqui”. Con cinco ramitas. Nunca tiene que ser pares. Siempre nones. Entonces usted toma la criatura, y toma la ramita, empieza con dos ramitas primero, después termina con tres. Y después junta las cinco. Y con las cinco le dice, “Yo te santiguo.” siempre haciendo la cruz. “Te santiguo en nombre del Padre, Hijo y del Espíritu Santo. Amén.” Cinco veces. Y eso es una santiguada. Así se santigua.

(C) O sea, siempre nones?

(P) Siempre nones, nunca pares. Siempre nones.

(C) Porque pares mal ...

(P) No, no, no. No resulta. No. Tiene que ser siempre lo contrario.

〈 9 〉 **“Novenario” como “contra” para el mal de ojo**

(C) Entonces en cuanto al mal de ojo no más tiene que ser determinados días.

(P) El martes y el viernes.

(C) Aunque venga una señora, por ejemplo, el miércoles, no se puede hacer.

(P) No importa. Se santigua igual. Sí, se santigua igual. Pero lo que sí tiene que hacerse para que el niño no se vuelva a ojear, hay que hacerlo nueve veces. Esas nueve veces tiene que hacerse en martes y viernes.

No, pero en este momento me traen una guagua o mañana o pasado, el domingo, los jueves, yo lo santiguo igual. Eso no interesa.

Y la persona quiere, me dice, “Sra. Elena”, como dice siempre, “me gustaría que le hiciera un novenario”, se llaman novenarios, “a mi guagüita.” “Claro.”, le digo yo.

Y al final se le hace un escapulario. ¿Sabe qué es un escapulario? Es una cintita roja que va con un pelito de perro ahí dentro. Porque si la guagua es mujer, tiene que llevar perro. Y si es hombre tiene que llevar pelito de perra. Todo lo contrario. Entonces eso se echa adentro de una bolsa de nylon, y se hace. Y se le cuelga al ladito izquierdo a la guagua. Claro. Un escapulario. Lo anden trayendo ahí, la bañen, qué sé yo, le cambian ropa, le cambian su escapulario. Y nunca se lo van a ojar.

(C) Ah, eso es “contra”?

(P) Eso es una “contra”. Eso son las famosas “contras”. Así es la cosa.

〈10〉 **Colaboración con el hospital**

(C) En caso de que, por ejemplo, mal de ojos, ¿también acuden a usted de parte del hospital, digamos?

(P) También. Voy al hospital a ver a los niños.

(C) ¿Porque ellos la llaman?

(P) Sí. Siempre me mandan a buscar. La enfermera jefe siempre me mandan a buscar. Aquí hay una enfermera jefe que es la Sra. Mari Poblette que es de la pediatría. Ella, yo cuando los niños están en el hospital, yo se los voy a ver. Yo se los mejoro. Siempre.

(C) Ah, ¿pero ella sabe que se trata de mal de ojo?

(P) Sí. O de empacho. Sí. Entonces, por eso ella me mandan a buscar. Yo voy a verle a sus niños, y se los mejoro. (...)

Igual que aquí el kinesiólogo, don Lalito. Cuando llega una persona si que él ve que no es quebradura ni ... “Vaya a donde la Sra. Elena, ella le va a hacer algo.” Así que lo hago.

(C) O sea, hay como una buena división de trabajo, digamos.

(P) Sí, muy buena, muy buena.

(C) Cada uno ...

(P) En su lugar. Sí. Claro. (...)

(C) Una consulta. ¿En la época de su mamá o de su abuela, también los médicos despachaban algunos pacientes que entendían que no se podían ...?

(P) Sí. Claro. Mire. El doctor Estagno, que en paz descance, que era el médico jefe aquí en el hospital, don Dino Estagno Nacioni, que era el jefe aquí, que murió cuántos años, y el doctor Terraza, otro doctor que había, cuando veían que ellos no podían decían, “Esta persona necesita medicinas de personas entendidas en los males. Entonces, llévenlo a una, busquen una persona que trate de mejorarlo. Porque yo ya no pude. Esto es algo sobrenatural.” decían ellos. “No está al alcance de nuestras manos.”

(C) Pero creían que existía otra parte, digamos.

(P) Sí. Siempre, toda la vida. Esos dos doctores siempre creyeron.

(C) Eso, ¿hace cuántos años que vivían, digamos?

(P) El doctor Estagno, cuántos años hará, unos siete años que murió, pu. Sí, si a la entrada del hospital está la foto de él, pu. “Dino Estagno Nacioni” dice. Que tiene un hijo, doctor también en Estados Unidos. Sí.

(C) Y también en caso de mal de ojo también?

(P) También, sí.

(C) Empacho, todo eso?

(P) Todo, todo.

(C) O sea, hace años ya que existe, cómo se llama, esa relación bilateral, digamos.

(P) Años. Sí. Años.

(C) En la época de su mamá ya existía?

(P) Sí, pue. Con mi mamá empezó la cosita. Y después murió mi mamá y ahí seguí yo.

(C) Ya, ya, ya. O sea, ya su mamá colaboraba con unos médicos, digamos.

(P) Siempre sí. Y ahí seguí yo. Y hasta el momento.

〈11〉 **La posición de la iglesia católica contemporánea frente al “mal de ojo” y “el mal”**

(C) La iglesia, por ejemplo, porque “el mal de ojo”, se cura con fe, ¿cierto? ¿Qué sería la posición de la iglesia católica en cuanto a la “santiguación”, por ejemplo? ¿La iglesia fue la que originalmente enseñó, o ajeno no más, independiente?

(P) No. Independiente. Porque el sacerdote generalmente no cree en esas cosas. Solamente dicen “lo llevo yo”, que lo bendiga, que le dé la bendición. Él lo bendice. Pero quizá él no lo cree en el ojo. Para ellos no existe.

(C) Ah, aunque la gente acude al padre ...

(P) Para que le bendiga a su guagua.

(C) Para quitar el mal de ojo, digamos.

(P) Claro, cuando está muy desesperado. Ellos lo bendicen, pero no saben de santiguar. Ellos no saben estas cosas. Para ellos no existe.

(C) Entonces, no puede curar el mal de ojo el padre?

(P) No. Lo bendice no más.

(C) Ah, para tranquilizar, digamos.

(P) Para tranquilizar, nada más. Pero nada más.

(C) O sea, usted es la persona que le puede quitar, digamos?

(P) Claro. Yo sí. Hay varias personas. Pero yo estoy, yo toda la vida lo he hecho. Mi madre lo hacía, yo también lo hago.

Así lo hacen en la iglesia.

(C) O sea, el sacerdote no cree ...

(P) Es que, cómo le dijera yo, está muy modernizado. Ahora no ... El sacerdote antiguo era el que creía esas cosas. El viejito. Usted hable con un sacerdote abuelito, le va a decir que sí. Que existe. Sí.

〈12〉 **Los pacientes llegan de todas partes**

(P) Y así tengo montones de cosas que contar. Porque hay tanta gente la que viene aquí. Me conocen de tantas partes. No es que yo esté diciendo. Vienen de Victoria, vienen de Temuco, vienen de Angol, de allá de Puerto Varas, de Osorno. De todas esas partes.

〈13〉 **También me acuden pacientes mapuchs, gringos, italianos, etc.**

(C) Ah, una última pregunta. También aquí, por ejemplo, a usted, acuden pacientes mapuches, no solamente, digamos, pacientes “chilenos”.

(P) Sí, sí. De todo. De todo. Y le voy a decir que tengo cualquier compadre mapuche. Y son respetuosos, cariñosos, pero en extremo. Y limpios. Son más limpios que uno misma.

Yo tengo una comadre que se llama Zoila Paillao de Cheuquelao. Hoy día no más anduvo. Andaba trayendo una hija enferma. De la vecícula. Son de la reducción Contreras que se llama. Es una reducción, queda cerca, aquí, de Traiguén.

Mire, yo tengo cualquier compadre ... Si tengo ciento cuarenta ahijados. Entre chilenos y mapuches, de todo. Sí. Gracias a Dios.

(C) O sea, también los mapuches traen enfermos, digamos, de mal de ojo, por ejemplo?

(P) Sí. Siempre. Empachao, ojao, quebrao, zafao, de todo. O que está esperando guagüita que ... también. Sí.

(C) ¡Qué bueno, entonces, usted está haciendo mucho bien, digamos!

(P) Uuuu, aquí cualquier persona me conocen. Sobre todo, todos los gringos aquí en Traiguén, los Arrivelos, los Estabun, que son muy nombrados aquí en Traiguén, y así los Widmer.

(C) O sea, también viene gente más, digamos, con recursos más altos, digamos.

(P) Sí, sí, toda la vida. Ricos toda la vida. (...)

(C) Pero, también algunos italianos de, por ejemplo, Capitán Pastene, también pacientes?

(P) Uuuu. No me diga na. Siempre esos me visitan, pu. Los Corteses, y los Yubinis, los Freschuquinis. Todos esos vienen aquí. Los, cuánto se llama, los Lionelli, también. Toda esa gente de Pastenes. En Pastenes, que le diga, si alguna vez tiene oportunidad de ir, y pregunta “Usted conoce a la Sra. Elena?”. “¡Claro, qué no la vamos conocer, si hemos ido donde ella y nos arregló esto, nos arregló lo otro!”

〈14〉 **Lo único que yo no trato es “el mal”**

(C) Otra cosa. También varias personas me han dicho “hacer mal”, por ejemplo. ¿Eso existe o no existe?

(P) Tiene que existir. Eso sí que yo no sé. No, ahí no.

(C) ¿Otra área, digamos?

(P) No, ésa es otra cosa. Ésa es ya maldad. Esas cosas yo no. Dicen que si existe el bien, por qué no existe el mal. Tiene que existir, ¿no es cierto? Pero en eso, son dos cosas diferentes. Pero no, no en eso no, yo no sé de esas cosas. Nunca lo ... No, no. Ahí sí que no. Todo lo demás sí, menos eso.

〈15〉 **Las únicas personas que sacan “el mal” son las “machis”**

(C) Pero usted conoce alguna persona que puede sacar el mal, digamos, en ese sentido?

(P) Sí, generalmente son la gente de campo, son las, cómo le dijera yo, son las “machis” de la tribu de los indios. Ellas lo hacen.

Pero cuando le hacen un “machituque” que dicen que es, pucha, le piden todo esto. Porque tienen que llevar harta gente, tienen que llevar hartos vinos, tienen que llevar harta comida, llevar un enfermo, y ahí, tontean pa'l mundo. Eso se llama “sacar el mal”. Ésa la sacan las machis de los mapuches.

(C) ¿Pero ellas sí que sacan, digamos?

(P) Ellas saben, pu. Ellos lo saben hacer esas cosas. Porque eso viene con ellas de generación en generación también. Claro. Ellas lo hacen.

(C) ¿Pero, digamos, entre la gente chilena, digamos, que no es mapuche, no hay personas que ...

(P) No hay, fíjese. No hay. No. No hay. Yo no he escuchado de alguien que haga eso. No. Aquí por lo menos, no.

(C) ¿Pero, sí que entre la gente chilena, digamos, hay gente que “hace mal”?

(P) De todas maneras, pu. De todas maneras. No lo hacen, no lo sabrán hacerlo ellos, pero ellas pagan, pu. Pagan. Van donde una persona que sepa seguramente y pagan. Ella existe.

(C) Entre los chilenos?

(P) Claro. ¡Putas son los que más existen, pu!

(C) ¿Usted sabe cómo hacen ellos?

(P) Ahí sí que no, fíjese. No tengo idea cómo lo harán. No.

(C) Pero sí que existen, digamos.

(P) Sí, sí existen.

(C) Pero solamente las personas que pueden sanar esa enfermedad tiene que ser machi no más.

(P) Una machi, nada más. Otras personas no, no lo hacen.

5. 注

- (1) 1992年の国勢調査によれば、14才以上のチリ人のうち、自らを何らかの先住民集団に帰属すると認識するものの割合は、総人口の10.33%である。(Los mapuches: comunidades y localidades en Chile (1997年), p.11.)
- (2) 医療人類学研究会(編),『文化現象としての医療』,162頁。
- (3) 古代から19世紀に至るまでの各地における邪視信仰の変遷については、エルワージ(1992年),14-54頁参照。現代のイタリアの邪視習俗については、井本(1999年),現代スペインの邪視については、Gómez(1992年)参照。
- (4) チリの邪視民俗については、O. Plath(1981年), pp.31-35.を,第9地域に北接する第8地域の現代の邪視治療師の実態については、Parker G.(1992年), pp.57-62.を参照。また,第8地域ニンウェ区の現代の邪視習俗に関して,ある患者家族が語った証言としては,千葉(2001年)参照。
- (5) 邪視治療師の大半が女性であるため,一般名称としては普通「サンティグアドーラ santiguadora」という女性名詞形が用いられる。これに対し,特に男性の邪視治療師を指す場合には,「サンティグアドル santiguador」という。
- (6) 「エンパチョ empacho」古い油で揚げたお菓子を食べたり,古くなった牛乳を飲んだりした際

に、胃または腸の粘膜にそのカスが付着して発生すると説明される疾患で、下痢、食欲不振などの症状を伴う。不思議なことに、医師の聴診やレントゲンでは認知できず、対処技能を持つ民間治療者に、エンパチョの発生部位(脊椎)を発見させ、それを「砕いて quebrar」もらうことによって始めて治癒できるという。ただし、全ての邪視祓い師が、ピントさんのようにエンパチョ治癒能力を持つわけではない。

- (7) トライゲン区における「平定」の次第については、千葉 (a) (2000 年) 参照。
- (8) カピタン・パステネ集落の形成過程については、Contreras B. y Venturelli A. (1988 年) 参照。
- (9) エル・ワージの古典的著作『邪視』には、19 世紀のイタリアにおいて、「邪視」をかける人物として忌み嫌われていた修道会士やローマ教皇などの事例に関する逸話が記述されている。(35-36 頁, 37-38 頁。)

なお、チリの邪視習俗形成におけるカトリック教会の影響とその変遷の問題は、今後の課題の一つとしたい。

- (10) 白人系住民による邪術の実践と、先住民シャーマンによる白人系患者の治療の具体的事例としては、千葉 (c) (2000 年) 参照。また、トライゲン区に居住する先住民シャーマンの証言としては、千葉 (b) (2000 年) 参照。
- (11) 1996 年に、トライゲン区に西接するルマコ区に住む先住民シャーマンの自宅で行われた「邪術」治療儀礼に参加する機会を得た。この時に患者として治療を受けたのは、首都サンティアゴに住む白人系男性であった。トランス状態のシャーマンに降臨した神格霊の言葉によれば、この男性に邪術をかけたのは息子の元嫁だということであったが、彼女は邪術をかけるために、やはり毎週火曜日と金曜日に墓地に赴き、呪術を行っている、ということであった。ピントさんの指摘と併せて判断すると、目的は全く逆だが、火曜日と金曜日が、何か超自然的な力が発揮されやすい曜日と認識されている点で共通しているといえる。こうした認識がどこから発生、あるいは伝播したのかについても、今後の課題としたい。
- (12) 「マキ maqui, maki」チリ原産の低木で、先住民マプーチェの間でも、聖木としてしばしば宗教儀礼や治療儀礼の場で活用される。ある先住民シャーマン(マチ)が主催した祈願儀礼における「マキ」の使用の事例としては、Chiba (1995), p. 208, p.209. 参照。
- (13) これに対し、先住民マプーチェの宗教認識の中では奇数は縁起の悪いものとされ、2, 4, 12 など偶数が好まれる。こうして、神格や補助霊の数、役職の人数、踊り手の列の数、踊りや歌の回数、お供えの酒や食物の数など儀礼にまつわる様々な要素が、「偶数」概念のもとに決定される。チリの文化人類学者エステル・グレベらによる 1970 年の研究では、老若男女 4 名から構成されるとする最高神格の特徴から、マプーチェたちが「4」を縁起がよく、完璧な数だと見なす旨を指摘している。(Ester Grebe y otros (1970), p.4.)
- (14) 「ノベナリオ novenario」十字架、聖人、聖母などの聖像を対象として、九日間行われる儀礼(ノベナ)の場で音読される祈祷。植民地時代のカトリック教会による布教を起源として民間にも定着した。今日チリ中央部地帯のスペイン系白人農民たちの間で行われているノベナの事例については、千葉 (1988 年), pp.92-95. 参照。
- (15) 「チリ人 chileno」19 世紀中葉まで自律的な領域を保持した先住民マプーチェたちは、一般のヨーロッパ系チリ住民を自分たち先住民と区別して、しばしば「チリ人」と呼ぶ。筆者もその意味でこの表現を用いている。
- (16) 「コンパドレ compadre」カトリック教会で子供を洗礼させるとき、子供の両親は名付け親になってくれた男性のことを「コンパドレ(代父)」, 女性のことを「コマドレ(代母)」とよぶ。また、子供の本当の両親の方も、代父・代母の側からそれぞれ「コンパドレ」, 「コマドレ」と呼ばれる。この場合はこの後者の意味である。この説明は、多くの先住民の親たちが邪視治療によって子供を救ってもらったことに感謝し、正式な洗礼の儀式を通じてピントさんに子供の名づけ親になってもらったという事情を示唆している。

このように、邪視習俗を通じて、スペイン系白人であるピントさんと先住民のマプーチェたちとの間に、一つの社会関係ネット・ワークが生成している事実は興味深い。

- (17) 「グリンゴ gringo」 一般にチリでは、スペイン系以外の白人系住民を「グリンゴ」と呼ぶ。例えば、ピントさんの挙げるエスタブン、ウィッドメルはいずれも、トライゲン区を代表するドイツ系移民の系譜を引く富豪一族である。

6. 参考資料

(1) 音声資料 (MD 録音)

Pinto, Elena, *Testimonio*, 7 de agosto de 1999, Traiguén.

(2) 文献資料

千葉泉, 「チリにおける宗教民謡「カント・ア・ロ・ディビーノ」—スペイン「教養」詩の詩型を同化したチリ農民—, 『地域研究』第6号所載, 東京外国語大学大学院地域研究研究会, 1988年。

千葉泉 (a), 「マプーチェ歴史伝承：トライゲン区(1)—ホセ・カディン・ピチュンが語る「平定」と土地闘争—, 『大阪外国語大学論集』第23号所載, 平成12年(2000年), 41-66頁

千葉泉 (b), 「「マチ」の証言：トライゲン区(1)—メレヒルダ・ウェンテラオの場合—, 『大阪外国語大学論集』第24号所載, 平成12年(2000年), 1-26頁

千葉泉 (c), 「チリ南部の民間医療に見る異文化接触—ある白人系患者の証言(1)—, *Estudios Hispánicos*, 25号所載, 大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室, 2000年, 139-154頁。

千葉泉, 「現代チリにおける「邪視」習俗に関する証言：ニンウェ区(1)—エラスモ・ラミレス氏の事例—, *Estudios Hispánicos*, 26号所載, 大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室, 2001年, 205-221頁。

Chiba, Izumi, “Un “Machi-Nguillatun” en Chile Contemporáneo”, en *Estudios Hispánicos*, Núm.20, 1995, pp.195-234.

Contreras Batarce, Juan y Venturelli Abad, Gino, *NUEVA ITALIA: UN ENSAYO DE COLONIZACIÓN ITALIANA EN ARAUCANÍA*, 1903-1906, Ediciones Universidad de la Frontera, Temuco, 1988.

エルワージ, F. T. (奥西訳), 『邪視』, リプロボート, 1992年。

Ester-Grebe, María, Fernández, Joaquín, Fiedler, Carlos, “Mitos, creencias y concepto de enfermedad en la cultura mapuche”, en *Acta Psiquiátrica y Psicológica para América Latina*, XVII, 3, Buenos Aires, 1971, pp.180-193.

Gómez García, Pedro (ed.), *El curanderismo entre nosotros*, Granada, Universida de Granada, 1997.

井本恭子, 「サルデーニャの村落と ocru malu—ひとつの人類学的解釈—, 『大阪外国語大学論集』第21号所載, 1999年, 155-174頁。

医療人類学研究会 (編), 『文化現象としての医療』, メディカ出版, 1996年。

Los mapuches: comunidades y localidades en Chile, Ediciones SUR, Santiago, 1997.

Parker G., Cristián, *Animitas, machis y santiguadoras en Chile*, Rehue, Santiago, 1992.

Plath, Oreste, *Folklore Médico Chileno*, Editorial Nascimento, Santiago, 1981.

(2002. 4. 30 受理)